2026年度　入学試験問題

国　語

（第2回）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

II

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の**文章A**～**文章C**を読んで、後の問いに答えなさい。

文章A

「著作権の問題により、本文を掲載することができません。文字数43字×29行の文章」

文章B

③とんびに油揚をさらわれるということが実際にあるかどうか確証を知らないが、しかしこの鳥が高空から地上のねずみの死骸などを発見してまっしぐらに飛びおりるというのは事実らしい。

とんびの滑翔する高さは通例どのくらいであるか知らないが、目測した視角と、鳥のおおよその身長から判断して百メートル二百メートルの程度ではないかと思われる。そんな高さからでもこの鳥の目は地上のねずみをねずみとして判別するのだという在来の説はどうもはなはだ疑わしく思われる。かりにねずみの身長を十五センチメートルとし、それを百五十メートルの距離から見るとんびの目の焦点距離を、少し大きく見積もって五ミリメートルとすると、網膜に映じたねずみの映像の長さは五※ミクロンとなる。それが死んだねずみであるか石塊であるかを弁別する事には少なくもその長さの十分一すなわち〇・五ミクロン程度の尺度で測られるような形態の異同を判断することが必要であると思われる。しかるに〇・五ミクロンはもはや黄色光波の波長と同程度で、網膜の細胞構造の微細度いかんを問わずともはなはだ困難であることが推定される。

視覚によらないとすると嗅覚が問題になるのであるが、従来の研究では鳥の嗅覚ははなはだ鈍いものとされている。

その一つの証拠としては普通ダーウィンの行なった次の実験があげられている。数羽の禿鷹コンドルを壁の根もとに一列につないでおいて、その前方三※ヤードくらいの所を紙包みにした肉をさげて通ったが、鳥どもは知らん顔をしていた。そこで肉の包みを鳥から一ヤード以内の床上に置いてみたが、それでもまだ鳥は気がつかなかった。とうとうその包みを一羽の足もとまで押しやったら、始めて包み紙をつつきはじめ、紙が破れてからやっと包みの内容を認識したというのである。また④他の学者はある種の鶚の前へカンバスで包んだ腐肉を置き、その包みの上に鮮肉の一片をのせた。鳥は※鮮魚を食い尽くしたが布切れの下の腐肉には気づかなかったとある。

［1］

しかし、これは⑤ずいぶん心細い実験だと思われる。原著を読まないで引用書を通して読んだのであるからあまり強いことは言われないが、これだけの事実から、※鷲鳥類の嗅覚の弱いことを推論するのははなはだ非科学的であろうと思われるし、ましてや、とんびの場合に嗅覚がなんらの役目をつとめないということを結論する根拠になり得ないことは明らかである。

［2］

壁の前面に肉片を置いたときにでも、その場所の気流の模様によっては肉から発散する揮発性のガスは壁の根もとの鳥の頭部にはほとんど全く達しないかもしれない。また、ごく近くに肉の包みをおかれて鳥がそれをついばむ気になったのは、嗅覚にはよらずして視覚にのみよったということもそう簡単に断定はできない。それからまた後の例でも鮮肉を食ったために腐肉のにおいに興味がなくなったのかもしれない。あるいはまた食っているうちに鼻が腐肉の臭気に慣らされて無感覚になったということも可能である。

［3］

ダーウィンの場合にでも試験用の肉片を現場に持ち込む前にその場所の空気がよごれていて、人間にはわからなくても鳥にはもうずっと前から肉のにおいか類似の他のにおいがしていて、それに慣らされ、その刺激に対して無感覚になっていたかもしれない。

［4］

上述のごとく、視覚による説が疑わしく、しかも嗅覚否定説の根拠が存外薄弱であるとして、そうして嗅覚説をもう一ぺん考え直してみるという場合に、一番に問題となることは、いかにして地上の腐肉から発散するガスを含んだ空気がはなはだしく希薄にされることなしに百メートルの上空に達しうるかということである。ところが、これは物理学的に容易に説明せられる実験的事実から推してきわめてなんでもないことである。

たとえば長方形の水槽の底を一様に熱するといわゆる熱対流を生ずる。その際器内の水の運動を水中に浮遊するアルミニウム粉によって観察して見ると、底面から熱せられた水は決して一様には直上しないで、まず底面に沿うて器底の中央に集中され、そこから幅の狭い板状の流線をなして直上する。その結果として、底面に直接触れていた水はほとんど全部この幅の狭い上昇部に集注され、ほとんど拡散することなくして上昇する。もし器底に一粒の色素を置けば、それから発する色づいた水の線は器底に沿うて走った後にこの上昇流束の中に判然たる一本の線を引いて上昇するのである。

もしも同様なことがたぶん空気の場合にもあるとして、［X］の代わりに地上のねずみの死骸を置きかえて考えると、その臭気を含んだ一条の流線束はそうたいしては拡散希釈されないで、そのままかなりの高さに達しうるものと考えられる。

こういう気流が実際にあるかと言うと、それはある。そうしてそういう気流がまさしくとんびの滑翔を許す必要条件なのである。インドの禿鷹について研究した人の結果によると、この鳥が上空を滑翔するのは、晴天の日地面がようやく熱せられて上昇渦流の始まる時刻から、午後その気流がやむころまでの間だということである。こうした上昇流は決して一様に起こることは不可能で、類似の場合の実験の結果から推すと、蜂窩状あるいはむしろ腸詰め状対流渦の境界線に沿うて起こると考えられる。それで鳥はこの線上に沿うて滑翔していればきわめて楽に浮遊していられる。そうしてはなはだ好都合なことには、この上昇気流の速度の最大なところがちょうど地面にあるものの香気臭気を最も濃厚に含んでいる所に相当するのである。それで、飛んでいるうちに突然強い腐肉臭に遭遇したとすれば、そこから直ちにダイヴィングを始めて、その臭気の流れを取りはずさないようにその同じ流線束をどこまでも追究することさえできれば、いつかは必ず臭気の発源地に到達することが確実であって、もしそれができるならば視覚などはなくてもいいわけである。

とんびの場合にもおそらく同じようなことが言われはしないかと思う。それで、もし一度とんびの嗅覚あるいはその代用となる感官の存在を仮定しさえすれば、すべての問題はかなり明白に

解決するが、もしどうしてもこの仮定が許されないとすると、すべてが神秘の霧に包まれてしまうような気がする。

これに関する鳥類学者の教えをこいたいと思っている次第である。

（寺田　寅彦「とんびと油揚」全文）

文章C

この土地では動物を殺すと、コンドルがほかの腐肉食の猛禽とともにすぐそれを嗅ぎつけ、説明のできないやりかたで群れ集まる。ほとんどの場合、鳥たちは犠牲の肉がわずかに腐りだすよりも早く、それを発見し、白骨にしてしまう、という点を見のがしてはいけない。腐肉食の猛禽類は鼻がきかないことを実験で確かめたオーデュボン氏の業績を思いだして、わたしもその庭で次に述べるような実験をこころみた。コンドルを一羽ずつロープで縛り、壁の下に一列に並べる。そして肉をひと塊白紙に包んで、鳥たちよりも三ヤードほど高いところへ差しだしながら、何度も行き来してみるのだ。しかし、鳥たちはまったく関心を示さなかった。そこでこんどは床面にそれを置いて、老いた雄鳥の一ヤードほど前にくるようにした。すると鳥は一瞬だけ目を向けたが、二度は見ようとしなかった。わたしは棒切れを使って少しずつ包みを近づけることにした。とうとう、くちばしが包みにふれた。とたんに紙が怒りとともに破られ、つながれた鳥たち全部が身もだえたり、翼をばたつかせたりしはじめた。同じような実験を犬でしてみるとしたら、どんな場合にも犬をだますことは不可能だろう。腐肉食の猛禽類に鋭い嗅覚があるかどうかに関する証拠は、正否両方がふしぎに均衡して存在している。オーウェン教授はヒメコンドルの嗅神経が高度に発達している事実を指摘した。オーウェン氏の論文が動物学協会で朗読された夜、ある紳士が次のような話を披露した。紳士は西インド諸島で二度にわたり、埋葬されないので臭いが鼻につきだした死骸に気づいた猛禽が家の屋根に集まるのを目撃したのだそうな。この場合、死骸の知覚はどうみても視覚によってはいなかった。一方、オーデュボン氏とわたしの実験とは別に、合衆国ではバックマン氏という人物が、ヒメコンドル（オーウェン教授により解剖された種）もクロコンドルも嗅覚では餌をみつけていない事実を示すために、さまざまな実験をこころみている。かれは鼻がひん曲がるほど臭う腐肉の塊を、薄い布カンバスに包み、その上に肉の小片をばらまいた。コンドルたちはその肉をついばむと、あとは静かにたたずんだ。かれらのくちばしは腐った肉から八分の一※インチしか離れていないのに、腐肉の存在に気づかなかった。こんどはカンバスに小さな穴を開けると、鳥たちは即座に腐肉を発見した。カンバスを新しい布に代えて、その上にまた肉片を置くと、コンドルたちは布の下に隠された腐肉を踏みつけていても気づかず、上に置かれた肉だけをついばんだ。これが事実だということを、バックマン氏以外にも六人の紳士が署名し、保証している。

（チャールズ・ダーウィン著／荒俣　宏訳『ビーグル号航海記』より）

※ミクロン……長さの単位。一ミリメートルの千分の一。
※ヤード……長さの単位。約九一センチメートル。
※鮮魚……直前の鮮肉のことだと思われる。
※鷲鳥類……猛禽類（ワシ・タカ・トビ（とんび）・ミサゴ・コンドルなど）に同じ。
※インチ……長さの単位。約二・五センチメートル。

問1　次の文章は、もともと**文章B**の中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。最もふさわしい場所を**文章B**の中の［1］～［4］から一つ選び、番号で答えなさい。

それからまた次のような可能性も考えなくてはならない。すなわち、ある食物が鳥の食欲を刺激してそれを獲得するに必要な動作を誘発しうるためには単に嗅覚の刺激ばかりでは不充分であって、そのほかに視覚なりあるいは他の感覚なり、もう一つの副条件が具足することが肝要であるかもしれないのである。

あるいはまた、香気ないし臭気を含んだ空気が鳥に相対的に静止しているのでは有効な刺激として感ぜられないが、もしその空気が相対的に流動している場合には相当に強い刺激として感ぜられるというようなことがないとも限らない。

鳥の鼻に嗅覚はないが口腔が嗅覚に代わる官能をすることがあるとある書に見えているが、もしも香を含んだ気流が強くくちばしに当たっている際にくちばしを開きでもすれば、その香が口腔に感ずるということもあるかもしれない。

問2　――線①「『内田どこを見ている』という先生の声がしたので、すぐ目をそらしてしまった」とありますが、目をそらした理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　授業中に関係のないところを見ていて、先生から注意を受けて反射的にまずいと思ったから。
2　トビがネズミをつかまえるところを目にする機会は少ないので惜しいことをしたと思ったから。
3　トビが小さいネズミを見て舞い下りることは、人から見れば、考えられないことだと思ったから。
4　「トビがネズミをつかまえているところです。」と正直に答えたほうが良いかまよったから。

問3　――線②「なおさら臭（におい）とトビの動作とを結びつけて考えることはできない」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　トビがいた高さからすると、ネズミの体が小さすぎるから。
2　動いているネズミのにおいはさらにうすまって届きにくいから。
3　トビの鼻がにおいを感じる感覚はするどくはないから。
4　生きているネズミは死体のようにはにおわないから。

問4　空らん［A］～［D］にあてはまることばとしてふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1　さらに発達し　　2　まったくなく　　3　もっともよく発達し　　4　少し発達し

問5　――線③「とんびに油揚をさらわれる」という慣用句の意味として**ふさわしくない**ものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　当然自分のものだと思っていたものをうばわれること。
2　大切なものをうばわれてしまいあっけにとられること。
3　ばかにして油断していた相手からものをうばわれること。
4　思いがけない相手から思いがけない方法でうばわれること。

問6　――線④「他の学者」とありますが、それに最も近い人物の名前を［**文章C**］の中からさがし、ぬき出しなさい。

問7　――線⑤「ずいぶん心細い実験だと思われる」とありますが、その理由として**ふさわしくない**ものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　においを含んだ空気が動いているほうが、刺激が強く感じられるかもしれないから。
2　近くに肉があっても、実験場所の気流によっては鳥に届いていないかもしれないから。
3　あらかじめ十分な肉を食べていたために、食欲がわかなかっただけかもしれないから。
4　実験開始前から鳥はにおいを感じており、慣れて無感覚になっていたかもしれないから。

問8　空らん［X］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　アルミニウム粉　　2　幅の狭い板状の流線　　3　器底の色素粒（しきそりゅう）　　4　一本の線

問9　**文章A**～**文章C**を、書かれた年代が古い順に並べたものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　A → B → C　　2　A → C → B　　3　B → A → C
4　B → C → A　　5　C → A → B　　6　C → B → A

問10　**文章A**～**文章C**が書かれた後の新たな研究によれば、たとえばヒメコンドルはにおいを感じる感覚が非常にするどく、条件がよければ百メートル以上は確実に、ことによると一キロ以上離れたえさのにおいも感じとれること、においをかぐだけでえさの新鮮さがわかり、古すぎるえさよりも適度に新鮮なえさを好むこと、視力も非常にすぐれていることなどがわかってきました。では、**文章A**～**文章C**および、これらの新しい発見をふまえたとき、言えることとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　最近の研究成果によれば、寺田氏の意見の正しさが全面的に証明された。
2　トビが遠い地上のえさを目で見つけるという内田氏の意見は正しくない。
3　バックマン氏の実験のあやまりは、えさが古すぎたせいとも考えられる。
4　猛禽類がえさを探す手段は視覚でも嗅覚でもないということがわかった。

（問題は次のページに続きます）

2　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

留吉は稲田の畦に腰かけて遠い山を見ていました。いつも留吉の考えることでありましたが、あの山の向こうに、留吉が長いこと行って見たいと思っている都があるのでした。

そこには天子様のお城があって、町はいつもお祭りのように賑やかで、町の人達は綺麗な服をきたり、うまいものを食べて、みんな結構な暮らしをしているのだ。欲しいものは何でも得られるし、見たいものはどんな面白いものでも、いつでも見ることが出来るし、どこへゆくにも電車や自動車があって、ちょっと手を挙げると思うところへゆけるのだ。

おなじ人間に生まれながら、こんな田舎で、朝から晩まで山ばかり見て暮らすのはつまらない。いくら働いても働いても、親の代から子の代まで、いやおそらくいつまでたっても、もっと生活がよくなることはないだろう。牛や馬の生活とちがったことはない。たとえ馬であっても都で暮らしてみたいものだ。広い都のことだから、馬よりはすこしはましな生活が出来るだろう。留吉はそう考えると、もうじっとしていられないような気がするのでした。

それから三日目の朝、留吉は都の停車場へ降りていました。絵葉書や雑誌の写真で見て想像はしていたが、さて、ほんとうに都へ来てみると、どうしてこんなに沢山な人間が、集まっているのだろう、そしてなんのためにこの大勢の人間は忙しそうにあっちこっちと歩いているのだろう。ちょっと立っている間にさえ、自動車が二十台も留吉の前を走って行きました。

唐草模様のついた鞄一つさげた留吉は、右手に※洋傘を持って、停車場を出て、歩きだしました。

「おいおい危い！」腕に青い布をつけた巡査がそう言って、留吉を電車線路から押しだして、路よりもすこし小高くなった敷石の上へ連れていって、「電車に乗るなら、ここで待っていて下さい」と言いました。

そこには立札があって「①帯地全く安し」と書いてあるのです。留吉は「呉服屋の広告だな」と思いましたが、帯地の安いことは留吉には用のないことでした。それよりも、今夜留吉はどこへ寝たらいいだろうと考えました。

留吉は、小学校時代の友達で、村長の次男がいま都に住んでよい[a]位置を得てくらしていることを思い出しました。

卒業試験の時、算術の問題を彼に教えてやったことがあるから、訪ねてゆけば、彼もあの時の友情を思い出すに違いない。留吉は、昔馴染の友達の住所をやっと思い出しました。

そこは山の手の高台で、門のある家がずらりと並んでいるのでした。

二十四番地、都は掛値をする所だから、なんでも半分に値切って、十二番地、だなんて、村で物識の老人がいつか話してくれたのを思い出したが、まさかそれは[b]話だと、留吉は考えました。

さて二十四番地はどこだろう。

細っこい白い木柵に、紅い薔薇をからませた門がありました。石を畳みあげてそのうえにガラ

スを植えつけた塀がありました。またある所には、②まるで西洋菓子のようにべたべたいろんな色のついた、ちょっと［　　］てみたいような西洋風な家もありました。紅い丸屋根をもった、窓掛の桃色の、お伽噺の子供の家のような家もありました。

二十四番地！　さあここだぞ。今田時雄、ああこれだ、これが昔の友達、時公の家だ。白い石の柱が左右に立って、鉄の飾格子の扉のような門がそれでした。まるで郡役所のような門だなと、留吉は考えました。

門からずっと玄関まで石を敷きつめて、両側に造花のような舶来花を咲かせてありました。

「時公もエラクなったもんだな、算術なんかあんな下手糞でも、都へ出るとエラクなれるものだな」留吉は、昔の友達の門をはいって、玄関の方へずんずん歩いてゆきました。

すると、なんだか③変てこな心持ちが、留吉の心をいやに重くしはじめました。変だぞ、留吉は生まれてはじめて、こんな厄介な気持ちを経験したので、自分にははっきり解らないが、留吉はすこしきまりがわるくなったのです。それはたいへん留吉を不愉快にしました。

「時公におれは竹馬を作ってやったこともあるんだ。あいつはその事もまだ覚えているだろう」

この考えは、留吉をたいへん気安くして、元気よく玄関の前まで、留吉を歩かせました。「御用の方はこの釦を押されたし」と柱の釦のわきに書いてある。留吉は読みました。

「おれは用があるのだ。それにここの主人はおれの友達だからな」留吉は釦を押した。ヂリヂリヂリとどこか家の奥の方で音がしました。そういう仕かけかなと思って、留吉は、入口のガラス戸のとこを見ていますと、そこに一寸角ほどの穴があいています。そこで④大きな一つ眼がぎらっと光ったかと思うと、頭の上でヂリヂリヂリと、舶来の半鐘のような音がしました。留吉はもうとてもびっくりして、何を考える暇もなく、どんどん門の方へ駈けだしました。

するとその拍子に、留吉の帽子が留吉の頭から飛び去って、ころころと転がってゆきました。こいつは大変だと思っていると、悪い時には悪いことがあるもので、造花の西洋花の中から、歯をむいたチンのような顔をした、しかしずっと愛嬌のない大犬が出てきて留吉を追いかけました。

留吉は、十一番地のとこまでまるで夢中で駈け出しました。やれやれとそこで立ちどまると、あとから今田家と襟を染めぬいた法被をきた男が、留吉の帽子を持って立っていました。「どうも、これはお世話をかけました」と言って留吉がその帽子を受け取ろうとしますと、その手をぐっとその男は掴んで「ちょっと来い」と言ってペンキ塗りの白い家へ連れてゆきました。椅子に腰かけた人間の眼が十三ほど、一度にぎろっと留吉の方を見ました。それは巡査でした。

「先程電話でお話のあったのはそいつですね」一人の巡査が立ってきて、法被の男に言いました。

「こいつですよ、旦那」法被の男が言いました。

「私はその、なんにも悪いことをしたのではないですよ。その、私は、その、昔の友達を訪ねていったですよ。ただその、眼が、眼がそのヂリヂリヂリっと言ったでがすよ」留吉は巡査に言いました。巡査は髭を引っ張って言いました。

「お前は今田氏の昔の友達だと言うのだね。それに違いないか、何という名だ」。

巡査は今田氏へ電話をかけました。

「ははあなるほど、昔の友達だなどと当人は申して居りますが……ははあ、いやわかりました。では、とりあえずですな、外に窃盗などの目的はなかったものと推定して、放免することにいたしましょう。……はい……はい、どうもお手数をかけました。」チリンチリン

電話をかけ終わった巡査は、また留吉の方へ出て、さて言うには、

「今田氏はお前のような友達は持ったことはないと仰言るよ」

「今田時雄は、その、算術の試験の時……」

「もうよい。兎に角この帽子はお前に返してやるが、今後は、他人の邸宅へ無断で侵入しては相ならぬぞ、よしか」

留吉は、とある公園のベンチに腰かけて、つくづくと帽子を眺めました。

この帽子が悪いのだ。とにかくこの帽子は、おれを今よりもっと不幸にするかもしれない。田の草をとる時にも、峠を越す時にも、この帽子はおれの連だったが、今は別れる時だ。留吉は、帽子を捨ててしまおうと決心しました。そこで、腰かけていたベンチの下へ、その帽子をそっとかくして、そこを立ちさりました。公園の門を出て二三間歩くと、

「おいおい」と言って巡査が追いかけてきました。

「これは、君のだろう」と言って、帽子を留吉に渡しました。

「いや、その、これはその……」留吉が、何か言おうとするうちに、もう巡査は、ほかの帽子か何かを探しにいってしまいました。

留吉は、不幸な帽子を手に持って歩いているうちに、たいへん腹がへってきました。

「民衆食堂一食金十銭」と書いてある西洋館がありました。留吉は、そこへ入っていって、隅っこのあいた椅子に腰かけて、帽子を卓子の上へおきました。

十銭の食事が終わると、留吉は帽子を椅子の下へかくして、何食わぬ顔をして、出てきました。

「君の帽子だろう」あとから食堂を出てきた車屋さんが、すっぽりと留吉の頭へ、帽子をはめてしまいました。

留吉は、長い間こがれていた都を見物することも、何か仕事を見つけることも、また昔のお友達を思い出すことも忘れてしまったように見えました。ただもう、どうして、この不幸な帽子と別れたものかと、その事ばかり考えて、知らない街を通から通へと歩きつづけるのでした。

日が暮れて街の人通りが少なくなった時分に、留吉は街はずれの汚い一軒の安宿を探しあてました。

「⑤今度はうまくいったぞ」留吉は、宿の二階の窓から、裏の空き地へ帽子を投げ出しました。それで安心して、その夜はぐっすり眠ってしまいました。人の知らないうちに出立しようと思って、眼をさますと、帽子は枕元にちゃんとおいてあります。

留吉は、また不幸な帽子を持って、宿を立ちました。留吉は、とある大川の堤の上を歩いていました。

「ここだ帽子を捨てるのは。川へ流してしまえば、もう返って来ないだろう」

留吉は、橋の上から力一ぱい帽子を川の中へ投げやりました。帽子は、小さな波に乗って、ぶっくりぶっくり、川下の方へ流れてゆきました。

「あばよ、おとといで来いだ！」

留吉は、泣きたいようなよい気持ちで、だんだん遠くなってゆく帽子に別れをつげました。すると一艘（いっそう）のモーターボートが、ポクン、ポクン、ポクンと言いながら、帽子の方へ走り出しました。ボートの中には、白い服をきた男が二人と巡査が一人乗っていました。まもなく帽子に追いついて、一人が帽子を救いあげると、急いでボートを岸へつなぎました。留吉があっけらかんとして見物しているうちに、⑥帽子はいつの間にかまた留吉の頭の上へのっかっていました。

留吉は、なぜか嬉（うれ）しくなって、不幸な帽子を頭へのっけたままで泣き出しました。しかし、どう考えても、今田時雄の玄関の一寸角のガラスの穴からのぞいた眼が、公園のベンチのうしろの木の蔭（かげ）からも、公衆食堂の椅子の下からも、宿屋の裏の空地にも、大川の橋の下にも、いつもぎらぎらと光って、留吉のすることを見ているように思えるのでした。これは留吉には、たまらないことでした。

留吉が、不幸な帽子をかぶって、都の停車場からまた田舎の方へ帰ったのは、それからまもないことでした。

（竹久　夢二「都の眼」全文）

※洋傘（こうもり）……西洋風の傘（かさ）。

問1　――線a・bのここでの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a　「位置」

1　場所　2　財産　3　立場　4　成績

b　「話」

1　真実　2　冗談（じょうだん）　3　噂（うわさ）　4　言い訳

問2　この文章では都の様子と留吉が生活してきた田舎の様子がそれぞれ描(えが)かれています。これについて、次の問いに答えなさい。

(1)　留吉が想像していた都の様子を直喩(ちょくゆ)を用いて表している部分を十三字でぬき出して、はじめの五字を答えなさい。

(2)　現実の都の様子かどうかに関わらず留吉が想像していた都の様子としてふさわしいものを次から**二つ**選び、それぞれ番号で答えなさい。

1　ちょっと手を挙げただけで、どこへでも行ける。
2　ちょっと立っている間に車が二十台も前を通り過ぎる。
3　とても多くの人たちが過ごしている。
4　何かものをなくしてもすぐに自分の手元に戻(もど)ってくる。
5　多くの人たちがゆとりなく行き来している。
6　食堂では一食十銭で食事が食べられる。

(3)　田舎で生活していることを象徴的(しょうちょうてき)に表している部分を十五字でぬき出して、はじめの五字を答えなさい。

問3　――線①「帯地全く安し」とありますが、これは留吉がある漢字四字のことばを誤って読んだものです。本来はどう読むべきだと考えられますか。**すべてひらがなで**答えなさい。

問4　――線②「まるで西洋菓子のようにべたべたいろんな色のついた、ちょっと□てみたいような西洋風な家もありました」とありますが、この部分の内容から考えて□に入ることばを**ひらがな**二字で答えなさい。

問5　――線③「変てこな心持ち」とはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　仲の良かった時雄がもうすでに友人ではなくなっているかもしれないと怪(あや)しむ気持ち。
2　エラクなって都に住んでいる時雄にはもう会いたくないのだという確信に近い気持ち。
3　田舎から出てきたばかりの自分は都の中では明らかに邪魔(じゃま)な存在なのだという気持ち。
4　時雄に会おうという思いとは裏腹にここにいてはいけないかもしれないという気持ち。

問6　――線④「大きな一つ眼」とありますが、作品全体から考えると、この「大きな一つ眼」を留吉はどのような存在と受け取っていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　都には場違いな様子の自分を見透(すか)して精神的圧力を感じさせるような存在。
2　悪事を働かせないためにずっと自分を監視(かんし)している防犯カメラのような存在。
3　田舎者の自分を家の中には入れないで主人を守ろうとする番兵のような存在。
4　田舎から出てきたよそ者の自分に対して都の物々しさを知らせるような存在。

問7　――線⑤「今度はうまくいったぞ」とありますが、何がうまくいったのですか。十二字以内で答えなさい。

問8　――線⑥「帽子はいつの間にかまた留吉の頭の上へのっかっていました」とありますが、この描写(びょうしゃ)は留吉がこの後どうなることを表していますか。これを説明した次の文の空らん［　　］にあうように「――へ――」の形で五字で答えなさい。

留吉がこの後［　　へ　　］こと。

問9　この文章ではあるできごとがきっかけとなり、話の流れが結末へと展開していきます。そのできごとが書かれた段落のはじめの五字をぬき出しなさい。

3　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

【　　】季節　　牟礼　慶子

できるなら
日々のくらさを　土の中のくらさに
似せてはいけないでしょうか
地上は今
ひどく※形而上学的な季節
花も紅葉もぬぎすてた
風景の［　　］をよしとする思想もありますが
ともあれ　くらい土の中では
やがて来る華麗な祝祭のために
数かぎりないものたちが生きているのです
その上人間の知恵は
触れればくずれるチューリップの青い芽を
まだ見えないうちにさえ
春だとも未来だともよぶことができるのです

（『牟礼慶子詩集』より）

※形而上学的な季節……ここでは、はっきりとした形がなく精神的に感じられる季節のこと。

問1　この詩の形式は「自由詩」ですが、次の中から「自由詩」に分類されるものを一つ選び、番号で答えなさい。なお1～4の詩は全文ではなく一部分です。

1

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

（島崎　藤村「初恋」より）

2

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ
故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

（島崎　藤村「椰子の実」より）

3

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかな跫音空にながれ
をりふしに瞳をあげて
翳りなきみ寺の春をすぎゆくなり

（三好　達治「甃のうへ」より）

4

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

（金子　みすゞ「星とたんぽぽ」より）

問2　この詩に**使われていない**表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　倒置法　　2　隠喩　　3　擬人法　　4　体言止め

問3　空らん［　　］に入ることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　気品　　2　深遠　　3　華美　　4　枯淡

問4　――線「土の中のくらさ」とはどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　美しい見た目の魅力にあまりたよらないこと。
2　将来への明るい希望を内にふくんでいること。
3　見えてはいないが実は明るくはなやかなこと。
4　さわるとくずれてしまうようにはかないこと。

問5　詩のタイトル中の【　　】に五字以内のことばを詩中からぬき出して埋めて、この詩の主題にふさわしいタイトルを完成させなさい。

4　次の各問いに答えなさい。

問1　次の各文の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

1　中学に入学してシンキ一転スポーツを頑張る。
2　ベテラン社員にインドウを渡して、若手に道をゆずらせた。
3　シンケツを注いで作品を完成させる。
4　校庭カイホウの時間に遊ぶ。
5　夜には薬がキくだろう。

問2　次の1～5の意味を持つことわざを後の【選択肢Ⅰ】の中から選び、またそれと対立する意味を持つことわざを【選択肢Ⅱ】の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1　好きになった相手の悪いところまで良く見える。
2　一人でうまくいかなかったことも、多くの人数が集まればうまくいく。
3　退くときはその後始末をきちんとしておかなければならない。
4　危険なところには自ら近づかず、行動に気をつける。
5　実力不足の人ほど強がった態度をとる。

【選択肢Ⅰ】

ア　立つ鳥跡を濁さず
イ　三人寄れば文殊の知恵
ウ　瓜の蔓になすびはならぬ
エ　蛙の面に水
オ　あばたもえくぼ
カ　さわらぬ神にたたりなし
キ　弱い犬ほどよく吠える

【選択肢Ⅱ】

A　坊主憎けりゃ袈裟まで憎い
B　虎穴に入らずんば虎児を得ず
C　船頭多くして船山に登る
D　能ある鷹は爪を隠す
E　鳶が鷹を生む
F　青菜に塩
G　後は野となれ山となれ